

OBナオモ稽古ヲ續ケルノ事

昭和五十年入学 稲賀繁美

平成二年四月より三重大学に奉職する身となり、暇な一人身を良いことに、この夏は長野の夏を満喫させていただいた。白樺湖で研修会とは名ばかりの飲み会に出席したあとに参加した東京大学合気道部の合宿は、年寄りの冷水で何とか全日参加を果たしたが、果していつまで身のもつのやら、来年はと尋ねるにつけ内心おぼつかない。OB連の飲み会に連夜出席してなおかつ朝トレ皆勤というのは予想外にキビシイもので、現役諸君には十年後に嗤うものは嗤え、と申し上げておこう。小生よりまだひとまわり上の先

輩諸兄の不死身には、早くも肝機能障害を起した「若輩者」として、羨望すら抱けないのだが。

八月二十日から一週間、今度は長野県下高井郡山ノ内夜間瀬にて、三重大学、愛知教育大学、皇學館大学、鈴鹿短期大学の四大学合同合気道夏季合宿に参加させていただいた。いずれも当地伊勢に道場を持っておられる岩淵師範のご指導を拜する大学のサークルである。東大の合宿はもっぱら稽古の記憶ばかりで、リクリエイション水浴や白馬の雄姿、花火の夜も、写真を見てはじめて思い出すような有様なのだが、どうしたわけか、夜間瀬の合宿の方は細部がいまだに身心にその刻印を残していて、稽古のあいま、テラスの卓から山を見やりながら、ルーティンの翻訳に勤んでいたのも何やら妙になつかしい。

四大学合同の稽古というわけなのだが、指導される先生が同じなのに良くもこれだけ個性が違うものだ、というのが一番の印象であった。三重大学というところは、その立地条件もあって、入学辞退者数日本国内国立大学中 Worst three に入るのだが、それだけに、のんびりとして覇気に欠けるだらしなまなにかしら様になって風流なのだ。それに対して、偏差値は同じだがより都会志向の、とにかく自家用車がなければ通学不能という愛知教育大学の皆さんのりちぎにできちようめんな稽古ぶり。世界のスズカの地元の短大からはお嬢さん一人見えただけなので、これは一応判断をさしひかえるが、さすが旧宮内省直属大学と思わせるに

足る貫禄というか伝統を見せつけてくれたのが皇學館だった。

投げ始めたら六十本投げつづけ、投げられつづけが五セットとか十セット。それがおわったかと思うと今度は、できなくなるまで、腕立て、腹筋背筋、スクワット、首ふりなどなどのサーキット。要するに古典的シゴキなのですが、シゴかれたあぐく四年まで残った上級生の下級生への配慮の行きとどき、それに対する下級生の敬意と、それを適確に態度で表す術をたたき込んだしつめの周到（稽古が終ると、一年生はさっとオシボリと冷水の入ったグラスを持って上級生の所にやって来てヒザマズク、そのカッコのキマッテること）。まだこういううるわしい風習が日本にも残ってるのかと思うと、それを目のあたりにして、本当に感心してしまった私は少しオカシイのでしょうか。

でもシゴかれている皇學館の一年生が実は一人一人一番個性的だったのも事実ならば、皇學館の四年生が男女とも他大学に比して抜群に鍛え抜かれた妙技の持ち主たちとなっていたのもまた事実なのです。個性を殺す訓練によってはじめてベルソーナというものを個の内に宿すこととなるのが、この島国における人格教育のあり方なのだなあ、と改めて悟ったような次第です、逆説ですが。

こういうがむしやんな稽古に接すると、こちらも古い血がさわぎ、そこまで無理をしても必死に喰いついてくる若者たちに、それなれば教えてやろう、という気持ちも芽生えてきて、いろいろ

とさし出がましいいふるまいにおよぶ仕儀ともなりました。この年になってようやく見えてくるものがたしかにあることを、道場の稽古の中で感得させていただいたことへの感謝を、舌足らずですがこの場で表明させて戴き、皆様へのお礼に代える次第です。

その見えてきたこと、というのも凡百という以上におよそ身心技法に関しては無能者の言ゆえ、何を今さらなのですが、零、腹筋は背筋。腕力は脚力^{etc.}一、腰投げがどんな体勢からでも自由に決まるようになっていなければ、もともと一教以下の「基本技」は技として生きてくるはずもなく、稽古は全くまやかしに過ぎない。二、稽古をつけてもらう、とは、自分の息が切れてもう戦意を喪失するまでひたすら相手に向かって行く覇気の謂である。三、とりわけ男の場合、女性と稽古すると自分の力にたよってごまかしているところが如実に感知せられる。相手が鋭器を持っている（実際そうだが）ものとして稽古する緊張感はとりわけここで得られるのを大切にしたい。四、膝をためること、それで緩急自在に動けること、さらに下腹をいまさら張らなくても呼吸がおのずと丹田に宿る理合いを体得すると眼前が豁然と開けること。五、以上の如きこと一日稽古をおこなればモトノモクアミに消滅するものにして、不如意この上なきことは就中抜刀に尽きる。

以上のようなことは、実は山田高広先輩が昭和六十一年度の「赤門」におそるべき論理構築でもってさらに一歩も二歩も踏み込んで書き尽くしておられる（「稽古雑感」）。日本という土壌で

ここまでつきつめた考えをつづるのは容易なことでない。現役諸氏に改めて精読をおすすめしたい。読んでわかる、というわけにはゆかぬことを痛感するためだけにでも、『赤門』は既に他に例を見ぬ文化遺産なのだから。かく申す小生もはや昔のような自由な発想を失った自分の硬直化に辟易しつつ、破り棄てたい衝動を殺しつつ、なんとかこの駄文を草しているにすぎない。

蛇足ながら、「比較文化」なる講義を担当して、つくづくお題目の「国際感覚」にうんざりした。そこで今までわざと読まずに書いた本を開いて、やはりと思ったものがある。石光真清の手記。『城下の人』『曠野の花』『望郷の歌』そして『誰のために』。いずれも中公文庫。だまされたと思って、第一巻から読んでいただけると幸。現役諸君への言。